

1986年11月25日

## 草創期の日本野鳥生態映画

松山 資郎

鳥学会の会合で、野鳥の映画 — そのころは活動写真といった — が映写されたのは、恐らく大正11年3月の本会の創立十周年記念講演会の時がはじめてのようである。その時は「鳥類の進化」と「鳥類の保護」が上映されたとあるが、内容は全くわからない。

野鳥の生態映画の撮影は、大正10年6月、羽田の黒田家鴨場で、サギの繁殖状況、鴨猟の実況、宮内省鷹匠による古式の鷹狩の実況などがはじめてのようである。

そのころ農商務省水産局では、瀬戸内海で「鳥持網代漁」を撮影している。その一駒が鳥誌第14号の表紙に載っている。

農林省鳥獣調査室（内田清之助技師主宰）で本格的に野鳥の生態映画の撮影をはじめたのは、大正12年ごろからのようである。まず大岩紀鹿さんは富士山麓、日光、ついで千島や小笠原諸島で、映画撮影を続けられた。

とくに、大正13年6月30日、羽田の黒田家鴨場で、わが国ではじめて農商務省が鳥類標識調査事業をはじめた。その日ゴイサギに標識を付ける歴史的実況を撮影している。この時、大岩さんが使われた、当時としては恐らく最新式(?)と思われる機材が、鳥誌第18号に載っている。

この映画と、前記の「千島の鳥獣」は、大正14年1月の本会第22回例会で、その他の映画とともに映写された。

昭和のはじめになると、「動物映画」のことが科学雑誌の「科学知識」や「科学書報」などに紹介されるようになった。そのころの「動物映画」は外国で撮影、製作したものを、輸入したものである。それらの多くはアフリカの哺乳類が主である。

これらの外国映画の影響もあってか、わが国でも、農林省鳥獣調査室ばかりでなく、野鳥の映画撮影がはじめられるようになった。

山階芳麿先生の写真のお腕前はかねがね定評があったが、やがて映画撮影もはじめておられた。とくに昭和5年2月、鳥島で撮影されたアホウドリの繁殖状況の映画は、後世に残る極めて貴重なものである。後に全米科学財団から懇望されて、そのコピーを作って送られたという。（「山階芳麿の生涯」）

そのころ、鉄道省囑託の塚本閔治さん（ご本業は美術印刷の塚本商会の社長）は、余技として多数の山岳、登山、スキーの16ミリ映画を製作して有名であった。塚本さんはやがて鳥の生態映画でも、すばらしい作品を数多く製作され、各方面で絶讃されている。



左：高田武夫氏 中央：(筆者)  
右：下村兼二氏  
(昭和5年 富士山麓にて)

これと前後して、わが国の野鳥の生態写真の草分けともいふべき、農林省囑託の下村兼二さん（後の兼史）も、野鳥映画の撮影を精力的にはじめられた。下村さんは後に理研映画株式会社（理化学研究所の傘下）に入社され、器材、経費にも恵まれ、多くの傑作を発表された。下村さんは多年の野鳥研究の該博な知識と、また優れた文学的才能を発揮されて、戦後も多くの脚本を書き、演出をしておられる。下村さんから伺った話だが、ミサゴとライギョの闘争映画を作られた時は、GHQから睨まれるほどの迫力があつたようである。だが、昭和42年4月「特別天然記念物 ライチョウ」を最後に早逝してしまわれた。何んとも残念なことである。

その他、世界文化映画株式会社製作の「皇居の水鳥」は、宮内庁の大英断(?)で、皇居の道灌壕の畔にスタッフが月余にわたって、頑張つて撮影されたものである。これは樹上の巣箱で孵化したオンドリの雛の巣立の実況を撮影された、極めて貴重な記録である。

こうした多くの先達が苦心して撮影された得がたい野鳥映画は、恐らく数十本あるだろうと思う。

これらの野鳥映画のわかっている題名だけでも紹介したいが、紙面の都合で割愛した。

近ごろ、テレビで居ながらにして、世界各地の珍鳥奇鳥の生態が原色で見られるようになると、半世紀以上も前の白黒の野鳥映画は見劣りするだろうと思う。

でも、近年、自然環境が破壊され、野鳥が減つたといわれるが、ではどんなに変わったかは、百聞は一見にしかずである。古い映画で見比べればよくわかる。例えば、「千鳥」や「埼玉県鷺山」「鴻の鳥の蕃殖実況」など、今ではまぼろしとなつてしまった。

もはや手遅れで、なかには入手不能のフィルムもあろう。でも、今ならまだ間に合うと思う。幸い、農水産省林業試験場には戦火を免れ、さらに昭和21年7月の連合軍最高司令部の命で、時の内務省の検閲をも、とにかく無事にすませた秘蔵の貴重な記録フィルムが40本近くあると思う。それらを基幹に、諸先達の労作のフィルムをコピーさせて頂き、何処かに保存することはできないだろうか。

これは私が老令ゆえの懐古趣味で申すのではなく、野鳥の調査研究、保護の面でも必備の施設ではあるまいかと思う。

---

## 特 集

### 映 像 記 録 (1)

日本ほど光学機材や電気器機が安価で簡単に入手できる国はないでしょう。野鳥観察やスチール写真ではその種の近代武器が活躍し、盛況をきわめています。しかし今回取り上げた「動画」の部になると鳥声録音とともに今一の感があります。その原因の一つは観察用具とスチール写真機材を持てば、それだけでいっばいになるという物理的な面があると思われませんが、それ以上に高価で扱い難い割には実用にならない場合が多いからではないでしょうか。

しかし最近のVTRの進歩で、価格と使いやすさの面では相当改善され、画質・音質も一般的には問題もなく、とくに8mmビデオは将来実用に耐えうるものになりそうです。

今回の特集では1/2ホームビデオを实际使つての意見、プロの立場からの16mmフィルムの現状、そして研究面での利用の一例をそれぞれ短いスペースですが、わかりやすく書いていただきました。次回は、映画やビデオ、VD、TV番組などを集めて紹介する予定です。

#### ビデオ・バードウォッチング

津 戸 英 守

初めて、ソニーからホームビデオデッキが市販されたのは昭和50年であつた。TV放映を録画するのが殆んどで、ビデオカメラはモノクロ、とても野鳥の生態録画など出来な

かつた。55年頃から各種ホームビデオカメラが次々と発売され、小型、軽量、堅牢、各種オート機能搭載、価格も安くなった。

ビデオには1/2インチテープ使用のβとVHS、8ミリビデオとあり、又、各々セパレートタイプと一体型とある。ビデオによるバードウォッチングに適したホームビデオカ

メラ、デッキとしては、 $\frac{1}{2}$  インチテープセパレートタイプが望ましい。

野鳥の録画の場合はなるべくアップで撮る事が解像力の関係で望ましい。そのため望遠側に強い6~12倍レンズ付のものやレンズ交換式であれば20~25倍に拡大して、大きく引きつけて撮れる。又レンズが一般ホームビデオカメラに多い6倍ぐらいのズーム付であるなら、1.5倍や2倍、ソニーから発売されて居る4倍のテレコンバーターを用いると良好な結果が得られる。ただし望遠側が70ミリ以上無いと四隅がケラれる恐れがある。

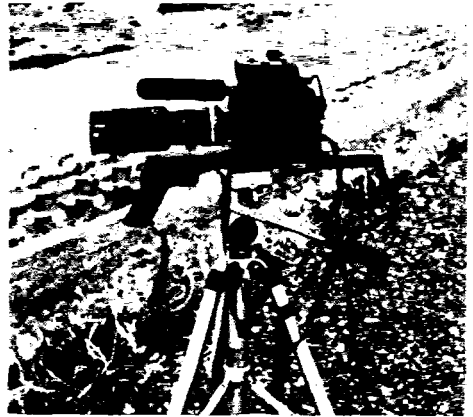
一般のホームビデオカメラに用いられて居る $\frac{1}{2}$  インチ撮像管、固体撮影素子 (CCD, MOS, など) の場合は、レンズの4倍にすると35ミリスチールカメラとほぼ同一大となり、12.5ミリ75ミリ付ズームレンズは、50ミリ~300ミリズームレンズ付35ミリスチールカメラに相当する。又、最近のビデオカメラは最低が25ルクスぐらいであるので、正確ではないがフィルムに換算してASA 200ぐらいとなる。4倍のテレコンバーターを付けるとF8ぐらいになるが、早朝や、日没近くでない限り録画出来る。

セパレートタイプの場合だと、デッキとカメラを組合せたり、更にグレードアップして3管式のセミプロ又は報道用カメラを使いより高解像度、より鮮明に録画する事も可能である。

又ポータブルPCMプロセッサと組んでデジタル録音デッキとして、ワイドなダイナミックレンジの録音が出来。又後日編集の場合も何かと便利である (最低一回はダビングする)。

野外での野鳥の録画となると、初めはビューファインダーやモノクロ (カラー付もある) では、対象物が発見しにくいものである。私はスポーツファインダーを改造して使用しているが、結果は慣れると良い様で、特に飛行中の鳥の追い撮りには便利である。

スチール写真に慣れていると、一度スタートボタンを押し録画していても鳥が急に飛び立ったりすると、ついまたスタートボタンを押しがちであるが、再生して見ると一番大切



日立製レンズ交換式ビデオカメラにタムロン75ミリ-250ミリスチールカメラ用レンズ使用。

な部分が切れて居り見ぐるしい。なお丈夫な大型な三脚を使い安定した画面を作る様になりたい。不安定な画面は大変見づらいものである。

テープは余りコマ切れにせず、野外では二度とないチャンスを逃がさぬ為、長廻しする。良いビデオ撮りは先ず野鳥の生態を知ること、機械に慣れること、辛抱強く待つこと、などが大切である。

#### ★ビデオボードウォッチングに必要な機材

1. ビデオカメラ
2. ビデオデッキ
3. カメラケーブル
4. バッテリー
5. ACアダプター
6. ビデオテープ
7. イヤホン
8. 三脚
9. コンバージョンレンズ, 望遠レンズ
10. 外部望遠マイク
11. 延長ケーブル

リモコン装置、更に進んでトランジスターで送信する方法などある。レンズ交換式であれば、ナイトスコープも取り付ける事も出来る (約75万円ぐらい)。

一体型ビデオは、サブビデオとして常時携帯して居る。最近の8ミリビデオは小型、軽量でかさばらず、持ち歩きに便利である。

再生のためのビデオデッキはなるべく高級品を求められたい。クリーンステル、スロー、コマ送り、早送り、逆転と出来、貴重な一瞬をくり返し見る事が可能である。カモの大群を録画・再生して見たら思わぬ珍鳥が混って居たり、キンクロハジロと全く同一生活し、潜水して魚ばかり捕食するカルガモやカワセ

ミを真似てダイビングして水中の小魚を捕るモズの行動を分析したこともある。また、野鳥ばかりでなく、環境の変化(定点録画)、公害、汚染など、貴重な記録として残す意義も大きく、冬期多摩川の野火を発生から鎮火まで録音録画した事があるが、再生して見ると野鳥の反応、動作などが写って居り、野火の恐ろしさが臨場感を持って感じられた。

採集(この場合100%死)したり、標本作りをしなくとも可成りの部分が判明する。またビデオでなければ解明出来ない事すら発見する。

スチール写真、録音に替え、大いにビデオを活用したいものである。

### 16 mm 撮影の実際

久保田 義久

近ごろでは、テレビや各種の集まりに野性動物の映像が良く利用されます。

そうしたものは、現在まだかなりのものが、16mmによって製作されています。しかし、ビデオ機器原産国の日本では、特にテレビ局では、今では殆んど製作がビデオ製作によるようになってきました。

しかし、こうした現象は特に日本だけの特殊な事のように、ヨーロッパやアメリカなどでは、いわゆるワイルドライフものは、殆んど16mmによって製作されています。それには色々な事情がある訳ですが、まず機動性、続いてスタッフの数、フィルム自体がそのまま、モニターテレビなどなしで見ることができなどの点で、フィルム取材が圧倒的に多い訳です。しかし、後で述べるように、フィルムとビデオテープの価格差など、実際的な面でビデオの方が有利な面もたくさんあります。たとえばヒナの巣立ちや木の枝から飛び立つ瞬間などはビデオテープの場合は、テープを気にすることなく、その瞬間のかなり前から回すことが出来ますが、フィルムではぎりぎりの瞬間まで待ち、しばしばチャンス逃してしまいます。ビデオにはそうした点で緊張感が欠けると言ったら、フィルム製作者の癖みととられてしまうでしょうか。

フィルム・ビデオの比較はこのへんにして、16mmフィルムの撮影の実際について記しま

すと、野鳥撮影に適したカメラ機材は、まずレンズ交換式であること、出来たら低ノイズであることです。16mmカメラは主にArri-flex SR 2, Aaton XTL, Bolex ELまたはEBMが現在生産されている機材ですが、ArriとAatonは日本での価格がほぼ1千万円(一式)もするので実際にはBolexか生産中止のBeauleuを使用し、これらのカメラのCマウントに各種日本製スチールカメラのマウントアダプターを取り付け、その望遠レンズで撮影する事になります。この場合の35mmスチール写真の場合とのレンズの比較は300mmレンズの時、16mmでは1500mmということになり、そんなに長いレンズは必要ありません。ただしカメラとレンズのサポートはかなりしっかりしたものがが必要です。

又、フィルムはリバーサルとネガポジ式とあり100 feet(約3分)で現像料込みでフィルム代は、リバーサルで約12,000円、ネガ・ポジ式でほぼ13,000円かかります。以上、現在では殆んどプロ用ですので、それでもという方で、もっと詳しい事をお知りになりたい方は直接お問い合わせください。

撮影の方法は、殆んどスチール写真とかわりませんので、特に書くことはありませんが、防音がされていないカメラで至近距離から撮影するばあいは、カメラにプリンプを掛けるなどして、音を防がないと、ノイズが連続するため、鳥の自然な状態がなかなかとれません。また、ハイスピード撮影では上記のカメラで50 f/s から64 f/s でそれ以上の高速度は専用の機種を使わなければなりません。そうした特殊目的の機材はテレビ映画機材のリース会社がありますから、1日単位で借りることもできます。また1分1コマといった微速度撮影はオートマチックな自動微速度でなければ、上記のカメラで行えます。カメラによっては一般のスチールカメラのインターバルメーターを改造すれば使用できる機種もあります。

欧米のワイルドライフ・フィルムの場合、特に研究者の撮影したものによいものが多く、しばしばテレビなどに現れています。経費の点などで色々問題があることと思いますが、

日本でも鳥学会のメンバーの中から優れたフィルムが製作されることを待望し、それに対するお手伝い出来る事を大いに期待しています。

フクロウは食後何時間で  
ペリットを吐くか

#### 阿 部 學

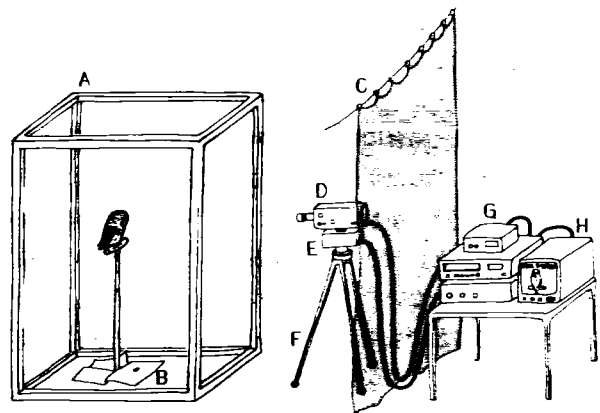
フクロウが1日にどれほどの量の食物をとるかを知ることは、相手が夜行性であるだけになかなか大変なことである。そこで考えられるのが飼育による投与実験である。フクロウについてはすでに風間が1974年に山階鳥研報にこの方法で得た結果として、1日に約120gと報告している。

自然の状態では一体どれだけの餌を食べているかを知りたいと思うのは人情である。そしてこれを解決することが、筆者が取り組んでいる“野兎鼠に対するフクロウの天敵としての役割”を定量的に把握する上で必要不可欠なことでもある。そこで考えついたのが、フクロウが1日に何回(何個)のペリットを吐出するかを知ることによって、野外で採集したペリット内容物から1日当りの摂食量を知り得るのではないかということである。このためには、フクロウが食事後何時間で、骨、歯、羽毛などの不消化物を吐出するかを知ることが必要となる。即ち、1日1個なのか、2個なのかを鍵となる。これを知る方法として、VTRを利用することを考えついた。即ち、フクロウが与えられたノネズミを呑み込んでから、ペリットを吐出するまでの時間を時刻入りのVTRテープに記録するという方法である。

まず、フクロウをポリネットをかけた網室(各3m四方、コンクリート床)に入れ、周囲を人による妨害のないように暗幕で完全に遮蔽した。カメラは暗幕と網室の間に置き、観察者は別室でカメラの上下、

左右及びズームレンズの画角を遠隔操作できるようにしており、フクロウの様子をモニターテレビで監視できるようにした。ガラス室内にはT字型のとまり木を一本だけ立て、フクロウが選択の余地なくそのとまり木に止まらねばならないように仕組まれている。観察者はまず、フクロウが野外で通常活動を始める時刻に生きたノネズミ(ハタネズミ)を投与し、フクロウがそれを襲い、とまり木に戻り、呑み込むまでの様子をモニターの画面で追いかけ、録画したあと、レンズの方向をとまり木の下に敷かれた白い紙面に移動させておくだけでよい。あとは記録する時間間隔のセットであるが、フクロウがノネズミを呑み込んでからペリットを吐出するまでの時間を精度高く、正確に知りたければ、その間隔を短かくすれば良い。昨今のVTRは2-3日間の記録は可能である。翌日、任意の時刻にVTRのテープを逆に戻し、白い紙面上に黒点(ペリット)が出現する画面を探し出し、その時刻を読めばよい。

初期には画角を広角にして、フクロウ本体とペリットが落下するであろう紙面の両方を同一画面で記録していたが、ペリットが小さく映り、糞との区別が困難な場面もあったので、後半からは紙面のみを大映しにした。



フクロウの観察装置。 A: 網室, B: ペリット採取用の白紙, C: 暗幕, D: ビデオカメラ, E: パンチルド装置(カメラ移動装置) F: 三脚, G: 上から、タイマー, VTR, パンチルド装置のコントローラー, H: モニターTV。

この一連の実験の結果、フクロウはノネズミを呑み込んでからペリットを吐出するまでに、最も短いときで5時間、最も長いときで22時間を要した。最も短時間の5時間というのは他に比して異常に短かったので例外として扱うべきであろう。従って、平均的には16～17時間程度とみてよかろう。即ち、フクロウは一般に夕刻から翌朝にかけて採餌活動を行い、餌となった動物の不消化物を十数時間後に吐き出すということが判明した。このことは、フクロウは1日に1個のペリッ

トを吐出すると考えられ、野外で採取したペリットの内容物が1日当りの捕食量ということになる。

ちなみにフクロウがペリットを吐き出すとき、どんな顔をするのか興味があったので、顔だけが映るようにセットしておいたところ、ひょうきんな顔立ちに似合わず、耳まで裂けているかと思われるほど大きな口を開いて、大あくびをするような様子で首を左右に振り、ボンとばかりにペリットを吐き出した。

DISCUSSION  
Discussion

## 鳥学会1986大会を終えて

長谷川 博

大きな問題を残すことなく、ともかく日本鳥学会1986年度大会を終え、私は一安心しました。大会の実際の準備をほとんどひとりでやらなければならなかったため、私の頭のなかでの想定でまちがっていないかどうか、最後まで心配でした。

最も大きなはずれは、当日参加者見込数でした。事前に申し込んだ予約参加者数は91名だったので、多くとも30名程度と見つもっていたのですが、結局、なんと68名でした。大会の会計に赤字を出さないようにするため、予約者数を基準に予算を組み、それにしたがってこまごましたものの準備をします。ですから、このくいちがいが大きいと、実行責任者は会期中それへの対応に追い回されることとなります。非会員の当日参加には歓迎せざるを得ないとしても、会員のかたの当日参加はほめられたことではないでしょう。事前に葉書なり電話なりでちょっと連絡してくれば無用な忙しさを避けることができます。とはいえ、このようなことを導いた計画(大会案内)に欠陥があったことも事実です。つぎのように改善するべきでしょう。

1) 発表申し込みと参加申し込みのしめ切り日を別べつにし、参加申し込みは大会の半月前まで受付ける。2) 以後の参加申し込みは当日参加を含めて500円程度割り増しとする。3) 都合により参加できなくなった予約者には返金する。

懇親会も当日とび入りがかかりあり、私は事前の契約を変更せざるを得ず、悩みました。金銭上の欠損が出た場合には結局、準備をした人に負担がかかります。さいわい今回はそんなことになりませんでした。懇親会も予約参加(送金して完了)を徹底させてほしいと思います。

もうひとつだけ、少数の人に対してですが、発表要旨原稿を是非しめ切りを守って送ってほしいと思いました。割り切って発表取り消し、あるいは要旨未着と処理することも考えられますが、そうしきれないのが現状です。急用ができて、しめ切りに間に合わなくなってしまった場合には、葉書きでも電話でもよいから、何日までに送ると一報すべきでしょう。なかには申し込み時の演題と発表要旨の演題とを連絡もなく平気で(?)変更してしまう人もいます。こうなるとプログラム編成すらできず、大会準備が全体に遅れてしまいます。このために私は計画していた野外調査を中止せざるを得ませんでした。

今後、大会に参加する場合、大会案内を是非まもってほしいと思います。そうでないと参加者全体に対してサービス低下を招き、大会を準備・実行するボランティアに無用の雑務を強い、心労をひきおこします。こんなことは、たぶん、だれも書かないだろうと思い、あえて書いておくことにしました。

## ミズナギドリの分布調査

1982, 84, 86年の7, 8月に私は三陸沖の海域(36~41°N, 152°Eまで)でカツオ船に乗ってミズナギドリ類の分布を調査してきました。カツオは水温が20~24℃の海域で主に漁獲されるため、これに近い水温域での観察に限られましたが、40°Nではフルカモメ、36°Nではオオシロハラミズナギドリと、亜熱帯域から亜寒帯域の種まで11種を記録することができました。このなかにはハジロシロハラミズナギドリ、ヒメシロハラミズナギドリの数十羽~数百羽の群れの観察もあり、これまで迷鳥視されてきた外洋性海鳥も日本近海にふつうに見られるのではないか、ということがわかりかけています。

(東京都大島・望月英夫)

## 「探鳥記」を出版

私は小さい頃より鳥が好きで、鳥に関するいろいろの思い出と共に育ちました。昨年出版した「探鳥記」(三学出版, 1,300円)は、私が若い頃にやった仕事をまとめたもので、山階先生のご序文にもあるように、鳥が好きだからこそやったのであって、もし好きでなかったら誰もいない処でただ独り命懸けの仕事をするようなことはなかったと思います。この「探鳥記」は鳥島に始まり北海道、さらに樺太や台湾、南洋など、今では外国になっている辺境の地での調査と紀行を主にしています。ご一読いただければうれしく思います。

(群馬県前橋市・山田信夫)

## データ蓄積中

オーバー・ドクター生活の寂しさに耐かねて、とうとう5年前に就職したのが歯学部。今の本職は解剖学の助手稼業ですが、歯無しの世界からいきなり歯だらけの学部へ飛び込んだわけで、随分変なハナシといえます。九州南部(奄美諸島も含めて)は、その立地条件から鳥についていろいろ面白いテーマが見つかり、そのいくつかについて暇を見つけてはデータを蓄積中です。

(鹿児島大・川路則夫)

## 白山へおいで下さい

現在、環境庁委託研究のイヌワシ、クマタカの調査を中心として、白山の登山道沿いの鳥のセンサスなどを行っています。特に詳しく調べているというわけではありませんが、イワヒバリ、ホンガラス、クロジの分布や季節移動にも興味を持っています。

日本野鳥の会全国大会が11月22-23日に石川県加賀市で開かれ、そのエクスカージョンの場所の一つが、当分のブナオ山観察舎になっています。みなさんから白山のイヌワシを見に来てください。

(石川県白山自然保護センター・上馬康生)

## ミシガンにて

小生、今年の4月より米国ミシガン州アンバーにあるミシガン大学にきています。この大学は野生動物の生態、行動研究が非常に盛んなところで、その関連の研究部門はDivision of Biological Sciences, Museum of Zoology, School of Natural Resourcesの3つにまたがってあります。小生は2番目の動物学博物館の鳥類研究部門に籍を置いています。

ここには鳥の研究者が大学院生を含めて14人います。研究テーマは様々で、アビ類やカイツブリ類の分類、生態を研究している人、ルリノジコ(Indigo Bunting)の生態、行動、特に囀りの文化伝達機構を研究している人、タイランチョウ類の系統分類を研究している人、南米エクアドルでマイコドリ類の生態、行動を調べている人、エジプトの鳥相の起源と進化を研究している人、アリゾナの疎林でエナガ科のヤブガラ(Bush Tit)の社会構造、特に協同繁殖を調べている人、北米および西インド諸島でキロアメリカムシクイ(Yellow Warbler)の囀りを中心とした地理変異を調べている人、などがいます。

よくまあ、これだけいろいろなところでいろいろなことをやっている人が集まったものだと感心しています。注目すべきことは、女性の研究者が多いということです。14人中9人までが女性です(ついでに言うと、美しい

女性が多いです)。彼女らも男と同じように、あるいはそれ以上にがんばって野外調査をやっています。たとえば、1繁殖期に研究対象としている鳥の巣を100以上も見つける女性もいますし、望遠鏡、テープレコーダー、小形テント、実験器具などをもって一日中動きまわる人もいます。また、毒ヘビとたたかいながら鳥を捕獲し、観察を続ける女性もいますし、テープレコーダーのほかに銃をもって鳥を捕獲してまわる人もいます。

小生は、この夏、ムクドリモドキ科のコウウチョウ(Brown-headed Cowbird)の托

卵習性を調べました。この鳥は“野生鳥類界のニワトリ”とも呼ばれ、1繁殖期に30~40卵も産卵する(あるいはできる)と推定されています。仮親のヒナと一緒に育つタイプのこの托卵習性は、独占タイプのホトトギス類の托卵習性と比べて大変興味深いものでした。

今は紅葉の季節。オークやカエデの木々が黄や橙に染まり、アオカケス(Blue Jay)やリス(Fox Squirrel)たちがあちこちで木の実をさかんに貯えています。

ひぐちひろよし  
(東京大・樋口広芳)

## 総会で三宅島問題決議

去る9月14日に開かれた本学会の総会において、三宅島の自然環境保護に関する要望が決議された(注1)。これに基づき本会は10月9日黒田会頭名で、政府が同島に建設を計画している米海軍演習用空港に関し、栗原防衛庁長官あてに計画中止の要望書を、また稲村環境庁長官あてに計画中止努力の要望書を郵送した。

今回の決議は、空港の建設が、貴重な鳥類が多種多生息している同島の環境破壊をもたらすこと、バードストライク発生の可能性を生じさせること、日米渡り鳥保護条約の精神に反していること、の3点の理由により建設計画中止を求めたもの。

この決議に対し、若干の反響があった。地元の寺沢三宅村長から丁寧なお礼の電話があり、イギリスの日刊紙デーリーテレグラフ、伊豆諸島大島の七島新聞、日本共産党中央機関紙赤旗から取材があった。また、10月6日の参議院予算委員会で上田耕一郎議員(共産党)が「日本生態学会(注2)、日本鳥学会も重視して中止要望の決議をしている」と発言、政府の答弁を求めている(注3)。政府側は、「環境庁は、国立公園の風致景観保護及び鳥獣保護の観点から適切に対処する(稲村長官)」「火山観側への影響はあろうが、対処できる(橋本運輸大臣)」「富士箱根伊豆国立公園特別保護地区である大路池には手をつけないだろう。環境問題については担当の関係部局とよく相談して細心の注意を払いながら建設したい(宍倉防衛施設庁長官)」「(WWF総裁)エジンバラ公フィリップ殿下から反対の手紙を受けとったが、鳥の生態や海の状態の保存等については十分注意をして建設する、と回答した(中曽根総理大臣)」などと答えている。

エジンバラ公は10月7日から12日まで訪日されたが、この間に外務省高官から三宅島問題につき事情説明を受けたといわれる。9日には礼宮殿下のWWF日本委員会総裁奉戴式があり、晩さん会が開かれ、同公および黒田会頭も列席されたが、三宅島のことは話題にのぼらなかったとのこと。

現在、2、3の会員の協力を得て、幹事会でこの問題に関する資料を作成しており、まとも次第、アメリカ鳥学会(AOU)などにも本学会決議の趣旨を伝え、直接または間接にアメリカ政府にも要望を伝えることにしている。(竹下信雄)

注1) 決議文は日本鳥学会誌第35巻2/3号に掲載の予定。

注2) 日本生態学会誌第35巻第2号(1985)276-277頁。

注3) 第107回国会参議院予算委員会会議録第1号。



読者の

# 情報

コーナー

## 近畿地方のカラスのねぐら調査

近畿地方のカラスの分布、特にねぐらの分布を調べています。会員諸氏でカラスに関する情報をお持ちの方、ぜひご一報をお願いいたします。

〒570 守口市日光町41-1 大淀化工株式会社 特需部 福居 信幸

## 都市鳥シンポジウムのレジュメができました

本年度大会のシンポジウム「都市環境に生息する鳥類の生態」のレジュメ（B5版 12ページ、都市鳥研究会編）を作成しました。入り用の方は下記の方法でご連絡下さい。実費でお分け致します。

1. 封筒に ①住所・氏名を明記した3×10cm大の紙片（送付用宛名ラベルとして）  
②切手（70円2枚または140円分）
2. 締め切り：本年12月20日
3. 申し込み先

〒130 墨田区江東橋1-7-14

都立両国高校内 唐沢 孝一

## 文献サービスのお知らせ

鳥学会誌への投稿論文を増やすため今回、私の研究室で購読している鳥学関係の雑誌と動物行動・生態・社会に関する一般誌の目次だけをコピーした小冊子のサービスを計画してみました。

1号およそ30ページ位の内容で、年2回、希望者にお送りしたいと存じます。各自その中から欲しい論文があった場合には別途実費でコピーして送ります。その場合は1ページ10円位かかります。又、英語が苦手という方には一頁500円位で院生の勉強とアルバイトもかねて翻訳したものを送ることも考えています。1986年上半年号を創刊号にしたいと思えます。御希望の方は1,000円をそえて下記にお申し込み下さい。

尚、掲載予定の目次は、英国鳥学会誌(Ibis)、米国鳥学会誌(Auk)、ウィルソン鳥学会誌(Wilson Bulletin)、クーバー鳥学会誌(Conder)、オーストラリア鳥学会誌(Emu)、アフリカ鳥学会誌(Ostrich)、フィンランド鳥学会誌(Ornis Fennica)、オランダ鳥学会誌(Ardea)などの各号と、Nature、Science、日本生態学会誌(和・英)、日本動物行動学会誌、個体群生態学会誌、Behavioural Ecology and Sociobiology、Behaviour、Animal Behaviour、J. of Animal Ecology、Ecology、Ethology、African Study monographs、生理生態、American Naturalistなどに鳥関係の論文が掲載されたとき、です。

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学 理学部生物学教室 動物社会学研究室 山岸 哲

## ニホン・ミックの新聞の切り抜き専門誌には、 全国の貴重な新聞記事情報が集録されています！



## ニホン・ミックの新聞の切り抜き専門誌

月2刊 切り抜き専門 教育版	月刊 切り抜き専門 社会科版	隔月刊 切り抜き専門 人権と福祉編	月刊 切り抜き専門 労働版
月刊 切り抜き専門 健康教育版	月刊 切り抜き専門 生活と科学版	月刊 切り抜き専門 科学版	月刊 コラム歳時記

\*お問合せ・お申込みは\* 東京本部 ☎03(667)9871代 大阪本部 ☎06(365)1560代



株式会社 ニホンミック

東京本部 〒100 東京都千代田区三軒町2丁目1番7号(三軒町ビル) 営業時間 10:00-18:00  
大阪本部 〒558 大阪府住吉区西天満2丁目1番2号(吉田ビル) 営業時間 10:00-18:00

例会のお知らせ

1986年12月13日(土) 午後2時～4時ごろまで

講演：多雨林の鳥の生態 ～ オーストラリアの熱帯を中心として

橘川 次郎氏 (オーストラリア・クィーンズランド大学教授)

会場：東京大学農学部1号館第8講義室 (東京都文京区弥生1-1-1)

\*やむをえず会場、講演内容などに変更が生じた場合、12月11日～13日の間、テレフォ  
ンサービスをしています。 ☎ 0484(62)7141

新刊情報

「ハシボソミズナギドリ Puffinus tenui-  
rostris の大量斃死に関する総合的研究」。  
ハシボソミズナギドリ研究グループ(代表者  
黒田長久)編。6+178 pp. 非売品。1986年9  
月刊。

トヨタ財団から助成を受けて行なわれた研  
究成果の報告書。問合せは山階鳥類研究所気  
付でハシボソミズナギドリ研究グループに。

次回大会

1987年度大会は甲府(山梨大学)で、中  
村司氏を中心に実施されることに決まりました。  
なお時期・日程などはわかりしだいにお知  
らせします。また88年度はぜひ関西で開催  
してほしいとの希望がだされています。

＜評議員・監事の投票用紙が同封されています＞

1987・88年度の役員選挙のための投票用紙が同封されていますので、早急にご投票ください。  
締切り：12月22日必着。

＜1987年度会費の振替用紙が同封されています＞

本会の会費は前納制ですので、来年度の会費をお願いします。普通会员：4,000円 維持  
会員：10,000円

＜日本鳥学会誌35巻2/3号の原稿を受けつけています＞

今年度会誌2冊目(2/3号)の原稿は12月15日までに下記へお送りください。なお1号は本  
年度中に発行されます。

〒079-01 北海道美瑛市光珠内 専修大学北海道短期大学 正富宏之 宛

＜鳥学ニュースが年4回発行になります＞

本ニュースレターが来年から2・5・8・11月の季刊発行になります。 次号締切り  
1月15日

~~~~~  
ニュース編集部  
~~~~~

〒112 東京都文京区大塚5-40-10 ☎ 03(943)2161  
日本大学豊山高校 川内 博 宛

編集後記

本号から印刷面を少し右へずらしましたが、これは学会員からの提案で、綴じたときに(た  
いがい2穴パンチでファイルしている)読みやすくなるようにするためです。いかがでしょう  
か。読みやすく、使いやすくするための工夫がありましたら、小さいことでも結構ですので編  
集部までお知らせ下さい。末尾ながら執筆者の皆さんに感謝いたします。(川内)

鳥学ニュース No. 21

1986年11月25日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1  
国立科学博物館分館内 (振替) 東京1-6599  
(電話) 03(364)2311  
発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博 印刷所 文英社印刷